

学術用語のカタカナ書きに對する

一 試論

柴田幸雄、太田隆男、中塚正博

本年は明治における翻訳が大友教授により話される事も
あり、平常考えている問題を提起してみる事にする。平
成二年は皇紀二千六百五十年、西暦一九九〇年、庚午（平
年）になつてゐる。我々はいろいろな表現を用い、それに
慣れている。「ヘクター」と「坪」、神仏習合（これは表
現ではないが）もその一面かもしれない。東京の日本橋は
「ニホンバシ」大阪では「ニッポンバシ」もその一つであ
らう。以前私は『言語』（六卷二号、一〇五頁、一九七七
年）にこの様な事を記した事がある。最近テレビや新聞で
伊勢神宮の式内遷宮が報じられているが、十一月三日の
「渡りぞめ」と「渡リハジメ式」も二つの読み方になつて
いる。

平成元年度、日本生化学会、医科生化学教育協議会で④

として「生化学用語の改善」がとりあげられたが、なかなか
むつかしい。さきに『生化学用語辞典』がまとめられ、
化学同人から出版された（一九八七）。しかし外国語のカ
タカナ書きは至難のわざといふべきであろう。齊藤信『日
本におけるオランダ語研究の歴史』（大学書林、一九八五）
にもその苦労がみられる。「リーガン」「ヒットラー」「チ
ヤップリン」「バンコック」「ロス・アンゼルス」も皆変つ
てしまつてゐる。しかし教育用語が常に変つたのでは困
てしまう。「プロスタグランジン」が「プロスタグラン
ジン」になつたのはただ「d」に對する表記の違いであら
うが、キヌレン酸（独）がキヌレニン酸（英）になると困
つてしまう。これは英語のピルビン酸方式で書かれたので
あるが、そうだと「カイヌレニン酸」とならねばなるま
い。

高校生物で使われている物質交代（これはドイツ語の
「ストッフヴェヒセル」の訳であろう）は我々の方は代
謝として使つてゐる。この由来もはっきりせず、法華経・
無量義経・説品本・第二に使用されている三カ所の代謝不
住がその出所なのかちょっと不明である。新幹線の放送の

英語で、東海道が「トツカイドー」に聞こえるので、昭和六十三年末のアンケートの時に記したが、最近「トーカードー」にあらたまっている。まさか私人の意見のためではなからう。マリオ・ペイもその著 “The World Chief Languages” (一九五五) で「ヨコハマ」など一音ずつアクセントをつけないで発音せよと述べている。(スペイン語では「ヨ」が「ジョ」になってしまう)

最近の教科書をみていると同じ本なかで、ドイツ語読みと英語読みが「ゴツチャ」になっているのがみられる。「カルバモイル・リン酸」と「カルバミル・リン酸」はその一例といえよう。アスパラギン酸はドイツ語読みなのに、Asparagic Acid と書かれている論文があった。「変性」なども化学の熱変性などは「デナチュレーション」だが、病理学の方は「デジエネレーション」である。ビタミン学会の「V」も「ビールス」の方は「ウィルス学会」といつてゐる。「フハン」も「メシ」となる(『家政学用語集』、朝倉書店、一九八七年)。

私が使っている「ハシ」「ホホ」「シモフサ」も東京では「ハジ」「ホオ」「シモウサ」となるし、筋肉弛緩も「チカ

シ」と使っていたが、「シカン」が正しい(しかしこれは俗語となっている)。東京では「ヒ」が「シ」に、大阪では逆に「シ」が「ヒ」になる。東京の「コンド」「ツギ」も、私など大阪人は「先発」「次発」としないとわからない。大阪のウ音使もどうなったのであろうか。この頃とくに多くなった名古屋の敬語「ミエル」は方言学者柴田武氏の提案のためなのだろうか。私達の習った天皇名「反正」「顕宗」「元明」「明正」も昭和十五年八月二十二日、毎日新聞紙上で発表されているが、最近この統一が混乱している。清音から濁音への変化も『古事記伝』や『大日本史』をみるとわからなくなってしまう。実験の時に使うモル濃度も若い世代での英語的表現「モラー」が入ってきて時々混乱する。もっとも古い古事記・真福寺本でも六頁の陛下が階下と間違つて記されている。しかし所詮、外国語のカタカナ書きはまことにむづかしいと思う。だが教育面での統一はしなければならず、この機会に問題提起をした次第である。

(愛知医科大学)